**第１回大阪府日本万国博覧会記念公園運営審議会緑整備部会記録《要旨》**

○日時　　平成２６年６月１３日（金）　１０：００～１２：００

○場所　　ホテルラフォーレ新大阪　１９階　ヨーク

（大阪市淀川区宮原１－２－７０）

○議題　（１）「万博記念公園将来ビジョン（仮称）」について

（２）今後のスケジュールについて

○出席委員等　　石川部会長、篠﨑委員（５０音順）

尼﨑専門委員、甲谷専門委員、養父専門委員、山本専門委員（５０音順）

○事務局　　府民文化部理事　ほか

**【開会】**

＜審議会規則第５条第２項の規定により、会議の成立を報告＞

＜府民文化部理事挨拶＞

　　＜委員紹介＞

＜会議公開確認＞

**【議事】**

＜資料説明　資料３～６＞

**石川部会長**

議論の切り口は、何もないところから造り出してきた緑のあり方と、万博公園の森を　　どのようにしていきたいか、この両方を見据えながら議論を進めたい。

東京にはゼロから造った森として、明治神宮の森がある。これが１９２０年。大阪万博　　開催は１９７０年なので、それから先立つこと５０年。２０２０年は明治神宮鎮座１００年。１００年経った人工の森がどうなっているのかという学術調査が実施された。

明治神宮はビジョンが明確。明治神宮には、神社と日本庭園とイギリス風景式庭園の３つがあって、きちんと将来につないでいくという目標がはっきりしている。

本日は、万博公園の森のビジョン、即ち、大阪万博から１００年後の森をどんな森にしていこうとするのかという点を論点としていただいて、忌憚のないご意見をいただきたい。

**尼﨑専門委員**

「自立した森づくり」における「自立した」の意味は、何なのか。

**事務局**

旧日本万国博覧会記念協会が昭和４７年１０月に策定した「万博博覧会記念公園基本計画報告書」にも書かれていたが、「内外での都市化に抗しても生き生きとしている森であり、また多様な動植物と共存し安定している森」ということで、２０００年の完成を目標として、その頃には開発前の森林レベル、手をかけなくても自立している森という考え方であったと思われる。

「当時にはなかった『生物多様性に富んで生態系が安定した自立している森ということをめざそう』ということでつけられた森の名称」であると認識している。

**石川部会長**

私は、「自律」の方ではないかと思う。「自立」は独立という意味だが、多様性、循環を　　　意味するのであれば、律するという方が適切ではないか。

概念は、非常に重要。議論に時間がかかるかもしれない。

**養父専門委員**

この「自立した森」を管理するのに、ヘクタールあたりの年間経費はいくらなのか。

**事務局**

間伐等はボランティアの協力を得て行っていることもあり、経費はほとんどかかって　　いない。

**養父専門委員**

それが永続的に続くのか。

**事務局**

続けられるものと認識している。

**養父専門委員**

日本庭園の方は、どうなのか。

**事務局**

芝生の部分を入れて、年間約４，０００万円。

**養父専門委員**

お金をかけずに森を造るという意味で「自立した森」ということ。人材はあって、それを活用したらやっていけると。要するに「自分でやりくりできる森」であると認識。

将来どのような森にするのか、目標像が見えていない。明治神宮の森は、目的を持って　　造ったもの。他の国をみても、マレーシアの森林研究所は、１９２０年代から熱帯雨林を　　再生している。

目的性のない森づくりはできない。「こういう森を造りたい」という思いに対応できる　　技術はいっぱいある。でも、ミッションが見えてこない。

**事務局**

森づくりは、着手の段階では実験として始まったと聞いている。最終形の樹形、目標像は、着手から５年後に結果をモニタリングして、それを踏まえて管理手法を確立して行くというのが、これまでの（万博機構（協会））の手法。

しかし、審議会で議論いただいて、将来的な目標像を改めて決めていただくというのも、ひとつの手法。

**養父専門委員**

それは、順応的管理というのだが、それも目的性を持って管理していくもの。

ここで、将来の目標像をしっかり議論して形が見えるようにしておかないと、後々方針がぶれて振り回される。

**尼﨑専門委員**

万博公園の森は、粘土層で酸性という非常に悪い土壌条件の中で、初めは生育が悪かった。それが、いろんな努力をされて、２０年後には自分たちの世界を作り出したと聞いている。

資料では、植栽密度で３つの樹林があるということだが、目標を掲げていても、人が　　　手助けしないと成立しない。そういう意味では「自律」ではないか。

**養父専門委員**

雑木林は、手をかけないと守れない。数年ごとに伐採や下刈り、落ち葉拾いが必要。　　　これでは「自立した」とは言わない。

**石川部会長**

実際、静的にとどまっているものではない。「将来ビジョン骨子」で「自立した森」の　　　ビジョンは、どこに書かれているのか。

**事務局**

２７ページの中に、「④交流拠点としてのみどり」に概念的な要素として盛り込んでいる。

**尼﨑専門委員**

１７から１８ページの「３．地球環境の保全、循環型社会の構築」「４．ライフスタイルの多様化（共助社会）」「５．ライフスタイルの多様化（文化・スポーツを楽しむ環境）」の部分と融合しなければならない。

基本的に、森を育成する多様性、資源循環型という、人が森と関わっていく中で、　　　　森づくりがされていく。そういったことが「３．地球環境の保全、循環型社会の構築」で　　　感じられて、ＮＰＯやボランティアの方に取組みに入っていただいて、モデルを作っていく。その結果を受けながら、快適な空間を、高齢者や障がい者を含めて享受していく。そういうサイクルが読み取れる。

**山本専門委員**

「自立」については、完全に独立して成り立つような森をイメージしていた。万博公園の当初の目的としては、元の森に戻すことが主眼にあって、それは、人が手を入れなくても　　成り立っているということで、このような言葉が使われたのではないか。

ただ、今の公園の運営や管理、使い方を考えたときに、全く人の手が入らない森という　　のは難しい。そういう面で、律するという形での森づくりはある。それを具現化するために、個別に森をつくっていくのではなく、現在、ＮＰＯや市民の方が活用されたり、そこで　　　行われている活動と一体的に森づくりに参加していただくようなことを考えながら、最終の目標を設定していくことが必要ではないか。

**甲谷専門委員**

人の手が入らない限り持続できないので、「自立」ではないと感じた。

一方、万博公園の隣の大阪大学とは、かつては緑が連続していたが、阪大が建物を増築し、現在では、公園が孤立している状態になっている。空間的にいうと自立しているので、　　「自立」でもよいのかなと。

本当は、空間的な自立ではなくて、公園周辺の阪大や住宅地、公園南側の複合型施設や　　ガンバスタジアムなどと連続したような森とか、そのような考え方があってもよいのでは　ないか。

**石川部長**

「連続したという考え方もあるのではないか」ということで、非常に大事なご指摘と思う。

**篠﨑委員**

緑の少ない都市の中で、万博公園には人々が憩える場が公園の真ん中にたくさんあるが、外側からは全く親和性がない、人を拒絶する空間のように見えてしまっている。公園に入ると快適な空間はあるが、別世界を作っているようだ。そうでなければ、この空間を守れないという事情もあるだろう。

しかし、これからの高齢化社会の進行を考えると、入口の問題、その他、周辺との緑の　　連続性について、利用者がもう少しアクセスできるように開いていくことも必要ではないか。

万博公園の会計は、財政的に自立しなければならないということから、逆に地域から　　切り離した空間を造って、そこだけメリットを集約しようとしているような傾向があるとも思える。

利用者の立場からすれば、一番奥深いところに人の入れない森、その手前に少し開けた　部分、一番手前が芝生の交流拠点になるのがよい。万博公園は、周りが囲まれている人為的な中で、こういう造り方になって、切り離されたのではないか。

この構造を改めなければならない。高齢化社会を考えると疲れる公園であり、これが　　一番の問題点。日本庭園の茶室でイベントがあったとしても、駐車場から歩いて行か　　　なければならない。高齢化社会に適していない。

採算をとるという意味での自立、緑としての地域や広域への連続性・ネットワーク、　　　利用者のアクセスの３つの視点で考えていただきたい。

**石川部会長**

大変大事なご指摘と思う。

東京には、明治神宮以外に、もうひとつ大きな森がある。それは皇居。江戸城は、緑が　　　豊かだったわけではなくて、建物が建っていたし、明治時代は軍事基地であった。いわば、大正、昭和で緑を造ってきた。

皇居は、植物学者であった昭和天皇が、こういう森にしたいというビジョンを描かれて　造ったもの。武蔵野の雑木林が理想だったので、常緑広葉樹林にされなかった。水田や畑があるなど、ギャップが多い。すべて森ではない。池があったり、田植えをされたり、雑木林で明るい森。皇居は、四季折々の花が咲くような雑木林がビジョンである。

同じ時代を歩んできたのに、神宮の森と皇居は全然違う。それと、１９７０年に　　　　　つくられた万博の森、篠﨑委員が仰った利用者の利便向上、甲谷専門委員が仰った地域に　開かれた森など、こういった時代の要請を受けながら、何をめざしていくのか。今日は問題が投げかけられたと、私は受け止めさせていただきたい。

続いて、日本庭園に話題を移したい。

**尼﨑専門委員**

万博公園の日本庭園は、田治六郎先生が計画されて、あと数年すれば登録文化財になろうかというくらい、完成から時間が経っている。基本的には、田治氏の作庭意図を具現化、　　活かしていくということになる。

「資料６－２　国際観光公園化」で描かれた構想は、非常に分かりやすい。でも、外国の方が大阪に来られたら「なぜ日本庭園なのか」と思われる。外国人が日本庭園を見るのなら京都へ行く。そうではない、と実感してもらわなければならない。万博公園に来て日本庭園を見る気がなかった人が、公園を奥へ進んでいって「大阪にこんな日本庭園があるんだ」と、大阪の近代の日本庭園の素晴らしさを体感してもらうようにすべき。

これは、理屈ではない。世界の人が実際感動できる空間でなければならない。

**石川部会長**

この庭園は万博仕様で造られている庭園というところがあって、通常の伝統的なもの　　とは造りが違う。この点や田治氏の作品性を尊重する点など、いろいろな課題があるのではないか。

**尼﨑専門委員**

日本庭園と言ってもいろいろある。万博仕様の日本庭園が近代にできたからといって、　何ら、不思議ではない。それはそれで、非常に重要な空間である気がする。

**石川部会長**

ここで議題にしていただきたいのは、日本庭園の来園者が増えていないということ。万博公園の日本庭園は、技術は素晴らしいものがあったとしても、来ていただくことができないのであれば、そこが問題なのではないかということ。

**尼﨑専門委員**

公園周辺のビルを隠そうとか考えずに、別の発想がないかどうかをしっかり議論する　　必要がある。

日本庭園も同じ。日本庭園は、日本のランドスケープの原点。日本庭園が閉鎖された空間というのは全く誤りで、周辺環境と一体となったという伝統が平安時代からあるので、　　別に閉鎖する必要はない。

しかし、導入は重要であり、万博公園の門を入ってバラ園があるのは人の気持ちを考えていない導入方法。日本庭園にはどういう入り方がいいのか、気持ちの転換が促されるような装置が必要である。

**山本専門委員**

日本庭園に関しては、万博仕様があってもよい。ここで京都の古いものを造ったとしても、レプリカであって、本物ではない。

逆に、万博公園の日本庭園は、万博公園として本物を造っているとも考えられるので、　　それをどううまく活用するのか、それを考えるべき。

**篠﨑委員**

日本庭園の来場者が少ないというのは、面積対比で仰っているのだろうが、日本庭園の　良さを味わおうと思えば、利用者はある程度限られても仕方がない。

むしろ、自然文化園よりも高い入場料を設定すべき。少し目的意識的に日本庭園を楽しみたいなという人に入っていただくというのであれば、数よりも質の問題を議論すべきでは　ないか。

万博公園の日本庭園は、万博仕様で素晴らしいものであるというお話だが、一般の人には静かに落ち着いて素晴らしい庭園を見られるのだが、京都の寺院の庭のようにコンパクトでないから、ガイダンスが必要。ガイダンスを考えた上で、導入を考えるという２段階が必要である。

**甲谷専門委員**

私も、入場者数は増えなくてもよいのではないかと思う。スペシャルなものでいい。お金をとってガイドツアーをしていただくこともどうだろうか。

**尼﨑専門委員**

日本庭園は特別なもので、空間性として人間が無限に増えたらよいとは思わないが、特別で静かでというのは幻想である。

日本庭園はそんな空間ばかりではない。園遊会をしたり、いろいろな日本庭園があった。それは我々の常識に縛られた既成概念であり、日本庭園ほど、自由な空間はなかった。

**養父専門委員**

資料には「国際交流公園化」と記載されているが、何をどのように見せるのか、どのような人が来ると想定しているのかわからない。ビザの発行要件が緩和された人々が相当数いる。彼らの求めているもの、ニーズは何なのか。ニーズのないところに国際公園はできない。

万博公園には民博がある。民芸館もある。日本庭園との連携についても、調整をしていただきたい。

**石川部会長**

多様なサービスの提供について、万博公園にはこういうポテンシャルがある、こんなことができる、ということを次回への宿題としたい。

**養父専門委員**

いっぱい挙げているが、ミッションがバラバラ。ここで見せたいものは何なのか、ここで体験させたいものは何なのか、分からない。

外国から来るとしたら「日本の何々」であって「大阪府の何々」ではない。成田に　　　　　降りようが関空に降りようが「日本に来ている」のであって、少なくとも「大阪府の施設を見に来る」とは思っていない。だから、外国から来る方にどのようなミッションで、何を　　利用してもらいたいのかをしっかり議論すべき。入場者を増やすには、そこから始まる。

**山本専門委員**

多様なサービスを提供する場所を考えていただきたい。

サービスに関しては公園の中だけではなく、駅よりも南側、そのあたりに集客が見込まれる施設ができる。そういったところとの連携を図る。若しくは、そういったところで多様な利用があって、公園に来てホッとできる、そういう差があるというところが、万博公園の　　立地の大きな特色。

この中でサービスを提供して、そのサービスから得た収益で、管理費用を賄うという　　考え方もある。先ほどの「自立」につながるのかもしれないが、それだけでは、賄いきれ　　　ないものがあるわけで、そうすると、外部の関連施設からの収益を万博公園の管理につな　げていくという、一体としてのサービスというものを、考えていくべき。

**石川部会長**

　時間となったので、ここまでとさせていただく。

以　　上